

## 審査の結果の要旨

氏名 正田 真利恵

本論文は、歩行による分散的注意および焦点的注意への影響を実験心理学的に検討したものであり、全4章から構成されている。

第1章では、本論文で取り上げる視覚的注意が、分散的注意と焦点的注意に大別できるとし、それらに関する従来の関連研究を概観している。そして、身体を固定した場合ではなく、身体運動を伴うときの注意特性を明らかにすることの重要性を指摘している。本論文では、身体運動の中でも歩行を取り上げ、下肢の周期運動や伸展など、歩行を構成する運動要素が、分散的注意と焦点的注意それぞれに影響する可能性に言及している。

第2章では、歩行による分散的注意への影響を調べる心理実験を3つ行っている。分散的注意とは、比較的広い領域に向けられる視覚的注意を指し、実験1では、下肢の周期運動と伸展を伴う歩行が、分散的注意に影響するかを検証するため、歩行、足踏み、正立時の分散的注意特性を比較し、歩行と足踏み時に上視野の注意領域が狭窄することから、下肢の周期運動が分散的注意に影響することを明らかにした。実験2では、歩行などの身体運動時の姿勢制御が分散的注意に影響するかを検証したが、姿勢制御が影響することはなかった。実験3では、下肢の周期運動の速度が分散的注意に影響するかを検証し、速度が増すと、上下視野の注意領域がともに狭窄することを明らかにした。

第3章では、歩行による焦点的注意への影響を調べる心理実験を2つ行っている。焦点的注意とは、詳細な処理を進めるための狭い領域に向けられる視覚的注意を指し、実験4では、歩行が焦点的注意に影響するかを検証し、水平方向への焦点的注意の精度が、下肢の伸展を行う歩行時に低下することを示した。実験5では、水平方向に対する焦点的注意の精度低下の時間特性を検討し、焦点的注意に対する下肢の伸展が与える影響は、刺激検出のための手がかり刺激提示直後に限り観察されることを明らかにした。

第4章では、研究成果全体をまとめ、下肢の周期運動が分散的注意に影響し、下肢の伸展を伴う周期運動が焦点的注意に作用するという結果は、外界を変化させる身体運動が、視覚的注意に影響するためと考察している。ただし、このような影響は、外界の変化を誘発しうる身体運動を行うときや、運動計画が行われるときに限り観察されたため、身体運動にかかわる高次情報に基づき、視覚的注意に作用する可能性を論じている。

本論文は、視覚情報処理において中心的な役割を果たす視覚的注意に関して、これまで十分に検討されていなかった歩行という代表的な身体運動との関係を明らかにしており、この成果は実験心理学研究における顕著な業績である。以上の点から、本審査委員会は、本論文が博士(心理学)の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。